

フィリピンとメキシコを結ぶ歴史に迫る

日時：2023年6月2日より毎週金曜日（全4回）18:00~19:00

参加方法：Zoomによるオンライン形式

後援：京都ラテンアメリカ文化協会

※事前申し込み制・参加費無料

かつてメキシコがスペインの支配下にあり、「ヌエバ・エスパーニャ」と呼ばれた16世紀から19世紀初頭まで、フィリピン諸島はその「ヌエバ・エスパーニャ」の統治下にあった。メキシコのアカプルコ港とフィリピンのルソン島のマニラ港を結ぶ太平洋航路では、当時往来した船の種類のカレオン船にちなむ「カレオン貿易」が行われていた。フィリピン総督や修道士は、スペインからメキシコを経由して、マニラに赴任した。アジアの品々はマニラを出発し、アカプルコから陸路でベラクルスを經由して、スペインのセビーリャに運ばれた。約300年に及ぶこの貿易ルートにおいて、「メキシコはヨーロッパとアジアの経由地に過ぎなかったのだろうか。今回の講座では、この疑問を出発点とし、講師の方々とともに答えを見つけてみたいと思うのである。

第1回 6月2日（金） 「マニラのスペイン人」

立岩礼子（京都外国語大学教授）

カレオン船でフィリピンに渡ったのは役人や修道士で、メキシコからは銀が、フィリピンからは香料や絹織物が運ばれたことが知られています。この貿易を支えたマニラのスペイン人の暮らしぶりやメキシコから援助についてお話しします。

第2回 6月9日（金） 「太平洋を渡った有田焼のチョコレートカップ」

野上建紀（長崎大学教授）

「鎖国」の時代、チョコレートを味わったことも見たこともない有田の陶工が作ったチョコレートカップが太平洋を越えてメキシコに運ばれていました。太平洋を渡った日本の工業製品のさきがけを紹介しながら、当時の陶磁器貿易についてお話しします。

第3回 6月16日（金） 「メキシコとフィリピンのコロニアル建築をめぐる」

ホアン・ラモン・ヒメネス（滋賀県立大学教授）

スペイン統治下のメキシコでは、当時のヨーロッパで主流だったバロック様式や新古典主義様式の建築が建てられ、その影響はフィリピンにも及びました。ところが、フィリピンの建築様式がメキシコに逆輸入された例もあります。様々な建造物をとりあげながら、コロニアル建築を紹介したいと思います。

第4回 6月23日（金） 「ココナッツの方舟—東から東へ」

宮原暁（大阪大学教授）

EX ORIENTE LUX ET PAX（光と平和は東方より）ということばがあります。ヨーロッパにとって、ある種の貴重な品々や情報は、「東方」からもたらされる必要があります。このことは、いくら稀少な物であっても、持ってこられ方が悪いと人びとの関心を惹かないということを意味しています。フィリピン諸島と新大陸、さらにヨーロッパの間で様々な品々がやりとりされる中、いかに「その運ばれ方」が重要であったか、農作物の場合を中心に紹介したいと思います。

●お問い合わせ●

京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター

〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6

TEL: 075-925-6853 E-mail: ielak@kufs.ac.jp

<https://www.kufs.ac.jp/ielak/index.html>